

現代芸術論 研究室

受容の観点から
作家・作品の
価値を探求する



平芳幸浩 教授
[デザイン・建築学系]

[経歴]
2000年04月-
国立国際美術館 研究員
2003年07月-
国立国際美術館 主任研究員
2008年04月-
京都工芸織維大学 准教授
2020年04月-
京都工芸織維大学 教授

[研究分野]
美術史、近現代美術、受容理論、視覚文化研究



現代芸術論研究室

[研究概要]
近代以降の芸術家のオーバリティを
受容理論的立場から相対化し、
複製技術時代以降の芸術作品のオリジナリティを
再考することをテーマとしています。
芸術を芸術家の個人的な営為としてではなく、
他者による受容と解釈の連鎖として
捉え直すことで、芸術活動を多角的に再考し、
旧来の「作家論」では見えてこない
芸術の成立要件を浮き彫りにすることを
目指しています。

20世紀を代表する芸術家であるマルセル・デュシャン。
現代美術の父とも呼ばれ、その作品は大きな議論を呼びました。
デュシャンが美術に与えてきた影響とは、またその人物像とは。
「マルセル・デュシャンと20世紀美術」展（2004）の企画にも携わった
現代芸術論研究室の平芳先生に話を伺いました。

伝統的な芸術家とは 違った顔を持つデュシャン

「好きな作家を一人挙げるとすると、間違いないデュシャンって言いますね。彼の考えていることが自分にとってすごく面白くて、彼の思考や作品をベースにして考える作業がやっぱり楽しいんでしょうね」。そう話すのは平芳先生。デュシャンが戦後のアメリカでどのように受容されてきたか、また1920年代から今日までの約100年間にわたって、日本でデュシャンがどのように受容され解釈してきたかについて研究を行っています。デュシャンとは、どのような作家なのでしょうか。「一般的に有名なのは、モナ・リザの複製画にひげを描いたり、あるいは男性の小便器を展覧会に出品したり、といった話です。要はスキンシップを引き起こすような、今でいう炎上系の作家の走りのような印象がありますね。兄が2人とも先に芸術家になっていて、デュシャンも芸術家を目指していたんですが、いわゆる伝統的な芸術家然とした生き方が嫌だったようです。自分の表現を突き詰めていった結果、美術の因習を次々と壊していくような形になり、それが後に伝説的に語られるようになっていきました」。作品そのものよりも、人物そのものが神格化されている点に興味を持ち、デュシャンに心を引かれていたという先生。そこから今の研究がスタートしました。「ちょうど僕が大学院に入って美術史学を学び始めた頃は、その美術史学を少し考え方直そうという時代だったんですね。それまでの美術史学は、ピカソやダ・ヴィンチなどすごい作家がいて、彼らがどのような作品を残してきたのかを細かく分析するというものでした。でも、美術作品は作家一人のものではなくて、例えばお金を出しているパトロンのものであったり、時の権力者の意向が反映されていたりします。あるいは、ゴッホなどは特にそうですが、後の時代に評価が大きく変わることもあります。それで、何が美術の価値なのかを学問的にもう一度問い合わせ直す動きがあった。その中でデュシャンは、近代以降の作家の中で、作家一人で作品が完成するのではないということを自覺的にやっていました。本人でもありますし、周りも彼をそう評価していたとのことだったので、研究対象としてすごく面白いなと思いました」

調査を通じて見えてきたデュシャン像

作品はほとんどがアメリカのフィラデルフィアにあり、その作品はほとんど見たという先生。普段の研究は基本的に文献調査です。また最近では、日本の戦後美術の作家たちがデュシャンをどのように捉えてきたのかを探るべく、存命の作家へのインタビューも実施しました。そうした調査から、どのようなデュシャン像が浮かんできたのでしょうか。「調べれば調べるほど、話を聞けば聞くほど、いろんなデュシャン像があると感じます。皆さんそれぞれに異なるバックボーン、問題意識があって、それがデュシャンの理解にどう反映されているのかを見ると、一つの作品を見ているみたいで面白いですね」。定まったデュシャン像はないとの答えでしたが、先生にとってのデュシャンとはどのような人なのでしょうか。「生前の彼は知らないので、人格的にどうなのかなはいろんな証言がありますが、なかなか本質をつかみ切るのが難しい人で、その辺は語り尽くせない部分があります。あとは、エスの名プレイヤーだったんですね。それがあつて、他人との駆け引きがすごく巧みな人物なんです。相手によって全く振る舞いを変えてしまったりするような人なので、人間的には嫌な奴なんですね（笑）。生真面目な人は嫌いだったみたいで、相手がそぞろと徹底的にふざけるという悪い癖はあったみたいで。そういう部分は好きですね」。その上で「デュシャンについての正解を出そうとしている研究でもないんですよ」と先生は言います。「アーティストがやつてきたことの価値は一つではない、というのを歴史研究として証明する、それが研究における狙いです」

デュシャンの作家としての評価は、現在はどうなっているのでしょうか。「いまだに評価する人としない人で分かれています。デュシャンがいなければ、美術はこんなにひどくはならないかっただろうと言う人もいます。客観的に美術の歴史を記述しなさいとなったら、超一流の作家という評価になると思いますけどね。デュシャンを無視すると、少なくとも20世紀の後半以降の美術について説明ができなくなるんです」。まさにその価値を示すかのように、「最も影響を与えた20世紀アート作品」のランキングでは



Fig.1——研究や指導と並行して美術工芸資料館でのデザイン資料の管理や展覧会企画も担っている。



Fig.2——最新の研究成果『日本現代美術とマルセル・デュシャン』
表紙は現代美術家森村泰昌の作品



Fig.3——デュシャンが残したメモの一葉。走り書きで作家の息遣いを感じられる。

ピカソの《アビニヨンの娘たち》を抑え、デュシャンの便器の作品、《泉》が第1位に選ばれています。

また研究室では、学生たちも各自のテーマで研究に取り組んでいます。研究指導を行う時に意識している点について、先生は次のように話してくれました。「大学生は答えを見つけるのは結構早いので、答えを見つけるというよりも、問題を見つけることをなるべくやらせようと心掛けています。どこに問題があるのかを探るのは、研究をしていく上で最初に重要なポイントだと思います」

デュシャンをより深く知るために

これまでに研究成果をまとめた書籍『マルセル・デュシャンとアメリカ：戦後アメリカ美術の進展とデュシャン受容の変遷』（ナカニシヤ出版、2016）『マルセル・デュシャンとは何か』（河出書房新社、2018）『日本現代美術とマルセル・デュシャン』（思文閣出版、2021）を著している平芳先生。「基本的には僕の研究は、デュシャンがどのように理解してきたか、受容されてきたかがテーマなので、極端な話をするときわがありません」と語ります。時が経ち、場所が変われば、また違った見方が出てくる。そ

れを追っていくと、研究はどこまでも続いているのです。そんな中で今後の目標について、先生はこう話します。「一つやりたいと思っていることがあります。今まで全然手をつけていなかつたんですが、デュシャンが書き残したメモを、自分なりにもう一度検討し直して、冊子ではない形で出版したい。ばらばらの状態で、読む人が自由にメモを拾い上げて読めるようなのです。デュシャン自身も生前、メモの複写版をばらばらの紙片のまま箱詰めした状態で出版していました。そうした文献に当たり、内容を読み込んで研究を進めたいと思います」